

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	教育実習の思い出 〈教育実習を顧みて〉
Author(s)	屋敷, 睦美
Citation	広大言語 , 8 : 49 - 50
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046294
Right	
Relation	



ことになる。実は、(彼がいない方がよい。)と言っているのである。併し、メイ訳と言えば、philosophy を「哲学」と訳して有名な西周でさえ、自分の書齋に *Chambre de Science* と平気で書いて「研究室」を意味するつもりでいたらしい。こんな言葉は、仏語のどこを探してもない。又逆に Maugham の *Of Human Bondage* の中に “It don't make much difference to me what the weather is, having to be in here all day.” とあって、結構つり合いは取れている。而も、この場合は、英人が英語を使っているのにこうなのだから、僕等は救われる。僕等は、蹉跎を恐れてはならない。習ったことは、どしどし使うべきなのだ。

さて一緒にそぞろ歩いて来た僕等の散歩道には、早くも真冬のあの切れるような西風を思わせぶりして僕らの頬を通りすぎゆく秋風と共に、長い静かな夜の帳 (the veil of night) が大急ぎで垂れ掛けて来たようです。そろそろ尽きないたわごと (balderdash) はこの辺で止めて、諸君とお別れしなければなりません。秋の夜は、詮ないざれごとを、いつ迄も語らんには貴重すぎるでしょうに。Au revoir! Ne vous enrhumétez pas!

教育実習の思い出

屋敷睦実

附属中学校・高校にて、

10月7日から22日までの教育実習を終えて、大学に帰った時には、文学部前のプラタナスの木がもう黄葉していました。長かった二週間、附属中学校、高校あわせて6時間の英語の授業を担当してみて、教えることの難しさ、教えてもらうことの尊さをしみじみとかみしめています。高3 Grammar 1回、高2 Reader 1回、高1 Reader 2回、中3 1回、中1 1回の授業でしたが、それぞれに違った味わいがありました。実習中は不注意から風邪をひいてしまって、とうとう最後までしわがれ声の授業でした。でもやればやれるものですね、不十分な教案をかかえて列車の中で書いた Teaching Procedure、高2 Reader の、質問攻めにあって、たじたじだった50分、中1の命令文の導入に完全に失敗してしまった授業、悔恨だらけの6時間ではありましたが、楽しい毎日でした。

でも、自分のことばかりに気をとられてしまって(うまく教えられるかしら、時間通り予定の所まで進められるかしら……)生徒中心に教壇に立つことが出来なかったことを深く反省しています。

英語の授業で感じたこと、それは何といても外国語を教えることの難しさであったと思います。中学校1年生の授業は特にそういったことが問題となります。むろん母国語教授の場合にはそれなりの困難が伴うであろうことは否めませんが。

今まで教えてもらう立場にあった私が、二週間、教育実習を通して、逆の立場で生徒と対決したわけですが、二度と帰らない思い出を、いつまでも大切に、今後の参考にしたいと思っています。

教育実習 —— 小学校で ——

山 本 美 代 子

6月15(土)～22(土)日までの一週間、まずは小学校での教育実習があった。先輩や友達から聞いたところ、付属の生徒は、大分教生ずれしているから、手恐いということだった。私よりも心配したのは、大きな小学生に上から見下すようだと、それこそ一度で自信を失くしはしないかという事だった。最初に見た学生は一年生だった。教室に入った途端、何か小人の国にいるような、小さい彼らが丸で私達の足下で目まぐるしく動き回っているような、そんな感じがした。何て小さいんだろう!とでも可愛らしかった。だが、尙も不安だった。私の教えるのは、小学生でも五年生なのだ——月曜日、いよいよ五年生に会うのだ。前にずらりと並んで9人の教生が自己紹介、その後生徒が1人1人席を立てて自己紹介してくれた。その間に少しずつ気分が落ち着いてきたので、目を上げて生徒を追って見た。中には、しっかりしたことを言う子がいたり、人を悠々と笑わせたりして私も気分がぐっとほぐれて、それが終ると、一通り皆を見ることができた。それでほんと安心して。小学生は小学生だ。子供らしく独特のユーモアで、紹介も上手だなと思った。ところが次の時間、先生は、叱られたのだ。私は、少々ふざけても、それはそれで面白く、好ましい紹介だと、むしろ感心していたのだが、礼の仕方の悪かった子、声の小さかった子、真面目でなかった子等、いずれもやり直しを命ぜられた。私自身、そういわれてみれば1つ1つ思い当るような、まずい紹介だったのだ。その時、小学校にいる事を強く感じた。その厳しさに、今まで漫然と物事を見、行っている自分を感じて、深く反省させられたと同時に、私は今、教生として来ているのだと自覚した。休み時間になると生徒の方から話しに来てくれた。彼等が何をどんな風を目で見、どんな風に受けとめ考えているのか、丸でつかめなくて、躊躇する事が多かった。ただひどく可愛らしく思えた。皆、案外素直だと思った。ここでは、出来る子、そうでない子の差があまりないようだった。我々の時には、かなりはっきりしたランクがあったようだが…。しかし1人特殊化した子